

現代フランス語の三人称物語における 単純過去と複合過去についての一考察

池田 晶*

Passé Simple and Passé Composé in 3rd Person Story in Modern French

Akira IKEDA

Abstract: In French 3rd person narrative, not only passé simples but also many passé composés can be found as opposed to Weinrich (1982). In this paper, I analyzed usage of passé simples and passé composés by comparing 4 versions of French texts with the assistance of a French speaker. In the version 1, passé simples are found in narrative and passé composés are found in dialogs. In the version 2, passé simples, which are supposed to be found in narratives, are put in dialogs instead of passé composés. In the version 3, passé composés, which are supposed to be found in dialogs, are put in narratives instead of passé simples. In the version 4, passé simples are completely changed into passé composés and vice versa. Through this analysis, passé simples, which is said to be objective and used in narratives, could sometimes be admitted in dialogs when we take characters' state of mind into consideration.

Key words : French, Passé Simple, Passé Composé, 3rd Person Story, Narrative

1. はじめに

池田晶 (2023)¹⁾において、テキスト言語学の視点か文学テキストを分析の際によく引き合いに出されるバンヴェニストやヴァインリヒの理論では、動詞形態が目ざされがちで、登場人物の心情面やテキストの受け手である読み手の姿勢を考慮に入れることが手薄になっていたのではないかという疑問を提起した。

【表1】

単純過去	複合過去
<ul style="list-style-type: none">書き言葉で用いられる現在との断絶のある過去を示す出来事の継起性客観的	<ul style="list-style-type: none">話し言葉と書き言葉の両方で用いられる過去と現在完了の二つの機能を持つ出来事の孤立性語り手の主観が入る

池田晶 (2023)¹⁾より

また、フランス語のテキストを実際に分析した際に、上の表にまとめたような単純過去と複合過去の特徴は大筋として認められるものの、単純過去でありながら複合過去のような

主観が感じられるようなものや、複合過去でありながら単純過去のような客観性が感じられるものもあった。言い換えると「単純過去の特徴に近い複合過去」と「複合過去の特徴に近い単純過去」と考えられ得るような例も見られたのである。

池田晶 (2023)¹⁾では、フランス語テキストの分析のたたき台として、地の文において同じ動詞が同一文中で複合過去と単純過去が用いられている事例が多く見られる、という理由で一人称物語の断片を用いて分析した。今回は分析の際に多く用いられる三人称物語を用い、しかも断片ではなく短編全体を用いてフランス語話者の感覚を紹介しつつ、単純過去と複合過去を分析することを試みる。

2. 現代フランス語の単純過去・複合過去について

ヴァインリヒの理論は印欧語で書かれたテキストを分析する際に構築されたものであるが、ヴァインリヒ (1982: 498)²⁾のフランス語の時制分類の表をまとめると以下のようになる。

【表2】

	回顧時制	ゼロ段階
説明の時制	複合過去	現在
語りの時制	大過去、前過去	半過去、単純過去

※本論とは関わらない「予見時制」の部分は省略した。

(2024年1月22日受理)

* 宇部工業高等専門学校 一般科

この「語りの時制」と「説明の時制」というのは、ヴァインリヒ (1982: 321)²⁾ で述べられているように、バンヴェニストが発話行為の 2 つの面を表すものとして考えた *histoire* (*récit historique*) と *discours* の対立概念にそのまま当てはまるものである。大久保 (1990: 296)³⁾ によれば「語りの時制 (*histoire*)」の面の発話行為は過去の事柄を物語るという特性を持つが、そのとき話し手はまったく介入することなく出来事自らが物語る。一方、「説明の時制 (*discours*)」の特性は話し手と聞き手の二者を想定し、話し手が聞き手に何らかの影響を与えようとするものである。テキスト時間と行為時間の関係についてのなんらかの問題性に話者が聞き手の注意を喚起しようとしないう場合、ゼロ段階と呼ばれる。このゼロ段階が語りの基調となる。行為時間を遡及的に捉えているのが回顧時制である。語りの時制におけるゼロ段階の単純過去と半過去のそれぞれの物語上での役割を説明するために用いられたのが前景・背景である。物語の前景は単純過去が担い、背景を半過去が担う。

ここで、ヴァインリヒの理論では、複合過去が語りの時制としては用いられていないことが指摘されているが、池田晶 (2023)¹⁾ では、語りの時制にも出現していることを示した。過去の研究においても、大久保 (1990: 292)³⁾ で述べられている通り、語りにおいて「複合過去と単純過去が同じ段落中、ある場合には同じ文中でさえ両方出てくる場合」があり、しかもそのような例が「意外にたくさんある」。次の大賀正喜氏とメランベルジュ・ガブリエル (1987: 209-210)⁴⁾ の対談の引用にも注目したい。

《メランベルジュ》

…背景説明は半過去で、物語は複合過去あるいは単純過去で展開されるわけです。ですから、物語をレジюмеしようと思えばね、半過去を全部捨てればいいんです。複合過去、単純過去を拾い上げれば、何が起こったか、レジюмеできるわけです。

《大賀》

複合過去、単純過去は *axe des événements* (出来事の軸) の上にのっかってるんだけれども、半過去は別の *axe* の上にある。しかし、必ずどこかつながりがあるんですね。背景説明とか理由とか。

下線は本稿筆者による

これは、フランス語教育者と日本語に堪能なフランス人がそれぞれ、特定の日本語テキストをフランス語訳し、そこで使われている動詞時制、代名詞、冠詞などを比較対談したものを起こしたものである。この対談の解説として東郷 (1998)⁵⁾ では次のように述べられている。

背景的説明は半過去で、物語は複合過去(あるいは単純過去)で展開されるので、物語をレジюмеしようと思えば半過去を全部捨てればいいのだと述べておられます。これはヴァインリヒ『時制論』では背景 (*background*) の半過去と前景

(*foreground*) の複合過去 (単純過去) と定義されているものですが (後略)

下線は本稿筆者による

ヴァインリヒ (1982)²⁾ では複合過去が語りの時制として定義されていないにもかかわらず、複合過去が語りで用いられるということがはっきりと示されている。その一方で、複合過去の語りについて否定的な見解があるが、以下の通りである。

- 1) 大久保 (1990: 308)³⁾ : (語りの中では) 原則として複合過去は現れない。複合過去が出てくると (中略) 奇妙な感じがする。ただし、*ibid* (1990: 292)³⁾ では、語りにおいて「複合過去と単純過去が同じ段落中、ある場合には同じ文中でさえ両方出てくる場合」があり、しかもそのような例が「意外にたくさんある」と述べられている
- 2) 青木 (1993: 28)⁶⁾ : よく言われているように、『単過』を『複過』に置き換えて見ると、物語の展開にまとまりがなくなり、聞くに堪えない物語になってしまう

東郷雄二 (2019: 67)⁷⁾ にあるように「古いフランス語では過去の出来事を表すのは単純過去形であった。(中略) しかし単純過去形が廃れるにつれて、複合過去形が過去の出来事を表すのに用いられるようになった」。ただし、単純過去は完全に廃れているわけではなく、*ibid* (2019: 77)⁷⁾ にあるように「現代においても、単純過去形は次のような談話ジャンル (小説、民話、おとぎ話などのフィクション、歴史記述、弔辞、死亡記事等) で用いられる。いずれも『発話時現在とは切り離された世界』という特徴を持つ」のである。つまり、細かく言えば例外は多くあるが、単純過去は書き言葉として用いられているのである。

本稿筆者としては、書き言葉、話し言葉という媒体差はあれど、単純過去も複合過去も、日本語に訳してしまえば差がないので、話し言葉においては複合過去は過去の出来事を表す一般的な形態で、会話でも、次々に展開する出来事の連鎖を示すときにも用いられているにもかかわらず、なぜそれが物語で用いられると「まとまりがない」という印象になるのかが、どうしても感覚としてつかめない。そのヒントとして、*ibid* (2019: 77-78)⁷⁾ 「複合過去形は発話時点から過去を振り返る時制であるため、出来事の終了時点で焦点が当たる。複合過去形が連続するとき、1回ごとに発話時現在から過去を振り返るため、複合過去形の現れる順番で出来事が起きたことを意味しない。(中略) 一方、単純過去形は出来事の開始点に焦点を当てる時制である。単純過去形の連続は原則としてその順番で出来事が起きたことを表す。」という記述があった。つまり、複合過去形で物事が記述されたとしても、記述された順に物事が展開していくのではなく、順不同である、ともいえるようである。この記述の順序にもかかわらず、出来事の順序は順不同である、ということが「まとまりのなさ」や「聞くに堪えない」ということにつながるのであろうか。

カミュの『異邦人』がほぼすべて複合過去で「語られている」

ことはよく知られているが、それは一人称の語りである。池田晶（2023）⁹でも一人称の語りを用いて分析したが、それでは三人称物語の複合過去の語りの場合はどうなるのか、また、たとえば、事件の目撃者として出来事を供述するとき、目撃者は単純過去と複合過去、どちらを用いて「話す」のか、そしてどちらを用いて「報告書を書く」のか。このような疑問も含めてフランス語話者の解釈を報告する。

3. フランス語話者の感覚

すでに述べたように、今回は一人称物語の断片ではなく、短い三人称物語全体を対象とした。選んだテキストは、全編にわたり、語りが単純過去で書かれている西村亜子著『フランス語で楽しむ日本昔ばなし Les contes du Japon en français』⁸の pp.42-56 から "La grue reconnaissante"（鶴の恩返し）である。Version 1 を何も手を加えないオリジナルとして、会話文の複合過去を単純過去に書き換えた Version 2、そして地の文をの単純過去を複合過去に書き換えた Version 3、そして地の文の単純過去を複合過去に書き換え、さらに会話文の複合過去を単純過去に書き換えた、つまり物語すべての複合過去と単純過去を入れ替えた Version 4 を用意した。（オリジナルである Version 1 を除く各資料は本稿末に掲載してある。）

【表 3】

	地の文（語り）	会話文
Version 1	単純過去	複合過去
Version 2	単純過去	単純過去
Version 3	複合過去	複合過去
Version 4	複合過去	単純過去

Version 1 はオリジナル・テキスト

質問を見るうちに目的には気付いてしまうが、あえて単純過去と複合過去の違いをみるという目的を伏せて、フランス語話者に次の質問をした。

1. オリジナルと比較して Version 2 から 4 はそれぞれどのように感じられるか
2. どの Version が一番奇妙に感じられたかの理由
3. 日本語に訳したら同じになってしまう単純過去と複合過去の違いは何か
4. どのようなときに単純過去を用いるか

【質問 1a】【オリジナルと version 2 の比較】

フランス語話者は、以下のようにテキストを抜粋し、すぐに異なる時制が用いられていることに気づいた。

[Version 1: Original]

[A] Avant qu'il ne pût lui adresser la parole, la belle dame lui dit: « Je me suis perdue par ce temps. Pourriez-vous me loger pour cette nuit ?

[Version 2]

[A'] Avant qu'il ne pût lui adresser la parole, la belle dame lui dit: « Je me perdis par ce temps. Pourriez-vous me loger pour cette nuit?

【試訳 A&A'】言葉をかけられずにいると、美しい女性が彼にいた「こんなに遅く、道に迷ってしまいました。今晚泊めてくださいますか？」

フランス語話者によると、version 1 では、会話文において過去の出来事を表す適切な時制である複合過去が使われており、文そのものが文法的にも正しく、version 2 では（会話文に）単純過去が使われており、登場人物同士の会話にもかかわらず、ナレーション（地の文）のような印象、もしくは語り手に関するもののように感じられる、とのことで、会話文（話ことば）に単純過去が用いられることに違和感を感じている。

[Version 1: Original]

[B] «... "Le riche marchand en veut encore ; il m'a promis de nous en acheter à un meilleur prix si j'en apporte le plus tôt possible. Nous pourrions devenir riches !"

[C] « Je voulais mener une vie tranquille avec toi. Mais maintenant que tu m'as vue, je dois te quitter. »

[Version 2]

[B'] «... "Le riche marchand en veut encore, il me promet de nous en acheter à un meilleur prix si j'en apporte le plus tôt possible. Nous pourrions devenir riches !"

[C'] « Je voulais mener une vie tranquille avec toi. Mais maintenant que tu me vis, je dois te quitter. »

【試訳 B&B'】「お金持ちがもう一度買いたいそうだよ。もし、早く（布を）持っていったら、とても良い値段で買うと約束してくれたよ。お金持ちになれるよ！」

【試訳 C&C'】「わたしは貴方と静かに暮らしたかったのです。でも、貴方は私（の鶴の姿）を見てしまったのです。私は去らなければなりません。」

フランス語話者は、これらの二つの会話文では、どちらも正しいが、登場人物の話し合いのコンテキストを考慮すると複合過去の方がより適切だと思われる、とのことで、話し言葉にもかかわらず、単純過去も許容している。

《質問 1b》【オリジナルと version 3 の比較】

フランス語話者は（地の文では）単純過去の代わりに複合過去が用いられていることに気づいた。複合過去を用いると地の文をインフォーマルな（形式ばらない）ものにすると同時に、語り手が直接自分に語り掛けてきているように感じられるとのことである。また、この物語がある作者によって書かれたのではなくて、友達が自分のために語ってくれているもののように感じられるとのことである。

《質問 1c》【オリジナルと version 4 の比較】

Version 3 と同じく、（地の文が複合過去で書かれているために）作者が自分に直接語り掛けてきているように感じられたとのことである。ただし、（会話文では単純過去が用いられているため）登場人物同士の会話文が、お互いの対話ではなくて、物語の「語り」（地の文）のように感じられたとのことである。

《質問 2》【最も奇妙な version について】

単純過去が用いられるべき場所（地の文）に複合過去が用いられ、複合過去が用いられるべき場所（会話文）に単純過去が用いられているという理由で、Version 4 が最も奇妙に感じられたとのことである。地の文が複合過去で書かれていることによって、物語がインフォーマルなものになるだけではなく、つながりがなくバラバラなものになってしまっている、とのことであった。

《質問 3》【単純過去と複合過去についての説明】

単純過去には小説などの物語で一般的に用いられているもので、作者が物語を「より」フォーマルで古典的で、そして時を超えたもののように感じられることを望んでいると考えられる。一方、複合過去は version 1（オリジナル）に見られるように、毎日の生活の中で話すときに多く使われている。複合過去は、物語をより身近で実体験のように感じられ（immersive）、語り手と読者・聴衆（観客）とより直接的なつながりを作り出す、とのことである。

《質問 4》【どのようなときに単純過去を用いるか】

実際に、フランス語話者同士で話すときは、日常生活の中ではほぼ単純過去は用いない。もし小説を書くような場合であれば、過去の出来事を詳しく著すために単純過去を用いると思う。

《追加質問》【供述調書と時制選択】

質問 3 に対しては「単純過去には小説などの物語で一般的に用いられているもので、作者が物語を「より」フォーマルで古典的で、そして時を超えたもののように感じられることを望んでいると考えられる。」という回答であった。フランス語話者は、英語で本稿筆者に回答したが、ここで「古典的」というのは classical を訳したものである。本稿筆者には、内容的には古典的、ということに加えて「何か信頼のおけるもの」という意味合いも込められているように感じられた。さらに、質問 4 で

「過去の出来事を詳しく著すために単純過去を用いると思う」という回答があったが、これらの回答の中で「フォーマル」「（信頼のおけるものという意味での）古典的」「過去のことを詳しく話すときに」という回答に着目して、「もし、偶然に殺人事件を目撃して、それを警察に起こった出来事を記述で報告するときには、複合過去と単純過去のどちらを用いるか」という質問をした。それに対しては、本稿筆者は、殺人事件という非日常の出来事ではあるものの、虚構の世界のことでなく、現実の世界の出来事としてとらえられるので、複合過去を用いるだろうと予想していたが、それに反し、フランス語話者は単純過去を用いるのが理想的である、との回答だった。しかし、供述調書を書くという日常からは離れた場で「フォーマル」ということが要求される場面であれば、主観が混じりやすい複合過去よりも単純過去を用いるという選択は納得がゆくものである。

以上、フランス語話者によるそれぞれの version の比較から得られた単純過去と複合過去をまとめると以下のようになるが、ほぼ、従来の研究で述べられているものに沿う形のものであった。

単純過去の特徴

- A) 「語り」の部分に用いる
- B) 会話文で用いると違和感がある
(ただし version 2 のような許容例もある)
- C) フォーマルなものになる

複合過去の特徴

- A) 会話文で用いる
- B) 形式ばらない
- C) 直接語りかけてくるように感じられる
- D) 語りで使うとまとまりがないイメージ
- E) より身近で実体験のように感じられる
→ 虚構性ではなく現実性

4. 会話文で単純過去が許容される例の考察

一般的には会話に単純過去が用いられるのは異例である。前節の再録になるが、以下が会話で用いると違和感のある単純過去の例である。

[A] Avant qu'il ne pût lui adresser la parole, la belle dame lui dit: « Je **me perdis** par ce temps. Pourriez-vous me loger pour cette nuit?

【試訳 A】言葉をかけられずにいると、美しい女性が彼にいた「こんなに遅く、道に迷ってしまいました。今晚止めてくださいますか?」

この例で違和感があるのは、会話文であるから、ということもあるが、単純過去は現実の時間軸とは異なる時間に属するので、

現実からは断絶がある。会話文は、物語の世界の住人である登場人物の現実であり、道に迷ったのは、その現実の世界での出来事である。しかも、ここでは物語中の過去で道に迷って、その結果ここに来た、つまり物語の現実の「今」につながっている出来事である。単純過去では過去と現在を連結することができないので、複合過去を使わなくてはならないのである。

以下の2例は、会話で許容される単純過去の例である。

[B] «... "Le riche marchand en veut encore, il **me promet** de nous en acheter à un meilleur prix si j'en apporte le plus tôt possible. Nous pourrions devenir riches !"

【試訳 B】「お金持ちがもう一度買いたいそうだよ。もし、早く（布を）持っていったら、とても良い値段で買うと約束してくれたよ。お金持ちになれるよ！」

[C] « Je voulais mener une vie tranquille avec toi. Mais maintenant que tu **me vis**, je dois te quitter.»

【試訳 C】「わたしは貴方と静かに暮らしたかったのです。でも、貴方は私（の鶴の姿）を見てしまったのです。私は去らなければなりません。」

この2例は、物語中の現実の中で起こったことを述べているので複合過去を使う場所であるにもかかわらず、そして、会話文にもかかわらず単純過去が使われることが許容されるとフランス語話者が感じている。池田晶 (2023)²⁾では、登場人物が相手にかかわるものを「拒絶」する場面の直後で、一人称の語り手が直前に複合過去で用いたものと同一の動詞を単純過去で語っている例を紹介した。その単純過去は、出来事を客体化し、出来事と一人称の語り手との間に距離を置くことを表現していると解釈し、フランス語話者もその解釈を適切なものであると考えた。また、それに加えて、その一人称の語り手の単純過去については、語り手の葛藤や苛立ち、落胆を表している、という解釈もあった。つまり、強い心の動きを単純過去で表現している、という解釈である。[B]の例では、貧しい自分がお金持ちになれるという嬉しさやときめき、[C]では見てはならないとお願いしたにも関わらず、結果的に鶴の姿を見られてしまったことへの強い絶望感を攀じとることができる。[B]と[C]に共通しているのは、「心の動き」である。このために単純過去が許容されているのではないだろうか。フランス語話者が挙げた例のほかにも、本稿筆者は次の例に注目した。

[Version 1]（語りの単純過去）

[D] Il hésita en pensant à la promesse qu'il avait faite, mais trop inquiet pour sa femme, il entra dans la pièce. **Et que vit-il?** Aucune trace de sa femme.

[Version 4]（語りの複合過去）

[D'] Il a hésité en pensant à la promesse qu'il avait faite, mais trop inquiet pour sa femme, il a entré dans la pièce. **Et qu'a-t-il vu?** Aucune trace de sa femme.

【試訳 D&D'】彼は約束を思い出してためらったが、妻のことがあまりにも心配で、部屋に入った。そして彼は何を見ましたでしょう？ 妻の姿はありません。

[D'] は語りの中ではあるが、話し手の存在を感知させる複合過去が用いられており、直接（想定された）読者へ語り掛けるものなので問題はないが、オリジナルの[D]は当然ながら単純過去が用いられている。一般的には出来事そのものが物語って単純過去は語り手を感知させない、つまり語り手不在、という研究も多い。しかし、疑問文ということは、明らかに「疑問される側」を意識するものであるので、「相手」がいることが前提である。時間軸の異なる、つまり次元の異なる者への語り掛けなのか、それとも、語り手の自問自答なのだろうか。ただし、語り手不在なのであれば、自問自答という解釈の選択肢はない。ただし、ここでは驚きが表されていることは確かである。つまり、「心の動き」である。それだけでなく、ここで使われている動詞 voir「見る」は知覚動詞である。知覚動詞が用いられると、それを「知覚する登場人物」と語り手の視点が重なる例が様々な言語による文学テキストで確認されている。したがって、この例は、もしかしたら「語り手不在」ということに一石を投じる例とみることができるかもしれない。

5. 結論

本稿で、ヴァインリヒの説とは異なり、フランス語の文学テキストの語りには単純過去だけでなく、複合過去も多く出現することを指摘した。そして、フランス語話者の感覚を通して、単純過去と複合過去を入れ替えた複数のテキストをに比較して、複合過去と単純過去にどのような特徴があるかを分析した。その結果、単純過去と複合過去には確かに従来まで提唱されていたように、それらの使用については、語り、地の文という分布の違いがあるが、主観が入りにくいとされてきた単純過去も、たとえ語りの中であったとしても、登場人物の心的態度や語り手と出来事との距離感と関係があることを示すことができた。また、会話文でも許容される場合も確認することができた。その際は、「心の動き」が大きく影響していると考えられた。今後は、より一層、登場人物と語り手のかかわりについて分析を深めてみたいと思うが、このような分析を通して、より豊かなテキスト解釈につながると考えたい。

資料

version それぞれの詳細は本論参照のこと。

Version 1 (original version)

西村亜子：フランス語で楽しむ日本昔ばなし Les contes du Japon en français, "La grue reconnaissante", 42—56, IBC パブリッシング, 2015.⁸⁾

Version 2

Il était une fois un jeune homme qui vivait seul dans la montagne dans une petite maison. Ses parents étaient morts depuis longtemps, et comme il était très pauvre, sa seule ressource était de ramasser du bois et d'aller en vendre aux villages voisins. Il vivait tant bien que mal en se rendant chaque jour dans la forêt.

C'était au début de l'hiver. Un matin, alors que le jeune homme allait faire sa besogne quotidienne malgré le temps neigeux, il **entendit** un bruit comme celui d'un triste cri d'animal. Il **se dirigea** dans cette direction et il **aperçut** une grue blessée.

Elle était d'une blancheur éclatante. Elle se débattait sur la neige, ne pouvant reprendre son vol. Une flèche avait transpercé son aile.

« Ma pauvre ! Qui te **fit** une misère pareille ! » **dit** le gentil jeune homme.

Il **prit** la grue dans ses bras et lui **enleva** tout doucement la flèche. Il lui **lava** la blessure avec de la neige. Puis, il la **reposa** au sol et **s'éloigna** d'elle à reculons pour ne pas l'effrayer.

La grue **battit** des ailes et **s'envola** dans les airs. Elle **décrivit** un cercle au-dessus du jeune homme comme pour le remercier et elle **poussa** un cri avant de disparaître dans les nuages.

Tard dans la nuit, alors qu'il y avait une tempête de neige terrible, le jeune homme, qui se tenait auprès du foyer, **entendit** quelqu'un frapper à la porte.

« Mais qui cela peut-il bien être ? Si tard, et par un temps pareil... » **se demanda-t-il**.

Il **ouvrit** la porte et **resta** figé : une très belle dame se tenait là !

Avant qu'il ne pût lui adresser la parole, la belle dame lui **dit** : « Je **me perdis** par ce temps. Pourriez-vous me loger pour cette nuit ?

--- Mais bien sûr! **répondit** le jeune homme. Entrez donc, mettez-vous devant le feu. » Et il lui **offrit** un bol de soupe toute chaude.

« Je vous remercie monsieur. Vous êtes vraiment gentil.

--- Mettez-vous à l'aise, et restez autant que vous le voulez. »

Les jours suivants, le temps ne s'améliorait pas. La belle dame **resta** donc plusieurs jours. Elle était bonne ménagère, et le jeune homme, tout content de cette compagnie agréable, commençait à se dire combien il serait triste quand elle partirait.

Un matin, lorsqu'elle lui dit : « Épousez-moi, s'il vous plaît. Je voudrais devenir votre femme », il **ne put** en croire ses oreilles.

Le visage du jeune homme **devint** tout rouge :

« Mais je suis trop pauvre pour vous rendre heureuse.

--- Qu'importe. Si on peut vivre à deux, je serai la plus heureuse du monde. »

Ainsi ils **se marièrent** et **connurent** des jours heureux.

Mais l'hiver de cette année-là **fut** long et rude. Alors que le Jour de l'an approchait, il leur était difficile de préparer les festivités.

« Que faire ? Il n'y a presque plus rien à manger. » **se plaignit** le jeune homme.

Sa femme **réfléchit** un peu avant de lui répondre.

« Il y avait un métier à tisser dans la petite pièce voisine, n'est-ce pas ?

--- Oui, c'est celui de ma mère. Je crois qu'il marche encore.

--- Je vais tisser. Mais je t'en supplie, n'entre pas et ne regarde pas pendant que je suis à l'ouvrage. Jamais. Tu me le jures ?

--- Je te le jure » **répondit** le jeune homme quoiqu'un peu surpris de cette étrange promesse. Mais il aimait sa femme.

La femme **s'enferma** dans la petite pièce pendant trois jours et trois nuits. Le jeune homme s'inquiétait pour elle mais se souvenant de sa promesse, il **se retint** d'aller la voir.

La troisième nuit, sa femme enfin **sortit** de la pièce, l'air épuisé mais souriante. Elle tenait une pièce d'étoffe dans ses mains.

« Voilà. Va vendre cette étoffe en ville. Ça se vendra très cher. »

C'était en effet une très belle étoffe, d'une blancheur éclatante, douce et légère comme si elle avait été faite avec le clair de lune.

Le jeune homme n'avait jamais vu un aussi joli tissu auparavant. Le lendemain, il l'apporta au plus riche marchand de la ville, qui le lui acheta contre une belle somme.

« Ma chère femme, je te remercie. On pourra passer l'hiver sans problème. Mais je t'en prie, tisse à nouveau, s'il te plaît. Le riche marchand en veut encore, il me promit de nous en acheter à un meilleur prix si j'en apporte le plus tôt possible. Nous pourrions devenir riches ! »

A ces mots, la jeune femme ne répondit pas. Mais, avec un triste sourire, elle dit : « D'accord. Je vais me mettre au travail tout de suite. Mais n'oublie pas ta promesse de ne pas me regarder en train de tisser, s'il te plaît. »

Dès cette nuit, la femme se mit à l'ouvrage. Le jour suivant aussi. Mais à la différence de la première fois, les bruits du métier étaient espacés, moins rapides et plus lourds. Le jeune homme s'inquiéta, d'autant qu'il lui semblait entendre parfois des cris de douleur.

Il hésita en pensant à la promesse qu'il avait faite, mais trop inquiet pour sa femme, il entra dans la pièce. Et que vit-il? Aucune trace de sa femme. Mais devant le métier à tisser se trouvait une grue blanche dont plusieurs de ses plumes manquaient. Le jeune homme ne put s'empêcher de pousser un cri de surprise.

En le voyant, la grue reprit la forme de sa femme.
« Oui, je suis la grue de l'autre jour. Comme tu m'avais sauvé la vie, je voulus te remercier en t'aidant à vivre. J'étais heureuse d'avoir pu être ta femme. Tu avais besoin d'argent, je donc tissai avec mes propres plumes... »
« Ma chère femme! Si je l'avais su... » pleura le mari.
« Je voulais mener une vie tranquille avec toi. Mais maintenant que tu me vis, je dois te quitter. »

Il tenta de la retenir : « Non ! Je ne veux pas que tu partes. Je ne veux pas d'argent, toi seule me suffit ! »

« Cela n'est pas possible. Adieu, mon cher mari. »

Et elle se transforma en grue blanche sous les yeux de son mari.

Elle s'envola dans le ciel, fit un cercle au-dessus du jeune homme pétrifié, poussa un cri déchirant avant de disparaître dans les nuages.

Le jeune homme ne la revit plus jamais.

Version 3

Il était une fois un jeune homme qui vivait seul dans la montagne dans une petite maison. Ses parents étaient morts depuis longtemps, et comme il était très pauvre, sa seule ressource était de ramasser du bois et d'aller en vendre aux villages voisins. Il vivait tant bien que mal en se rendant chaque jour dans la forêt.

C'était au début de l'hiver. Un matin, alors que le jeune homme allait faire sa besogne quotidienne malgré le temps neigeux, il a entendu un bruit comme celui d'un triste cri d'animal. Il s'est dirigé dans cette direction et il a aperçu une grue blessée.

Elle était d'une blancheur éclatante. Elle se débattait sur la neige, ne pouvant reprendre son vol. Une flèche avait transpercé son aile.

« Ma pauvre ! Qui t'a fait une misère pareille ! » a dit le gentil jeune homme.

Il a pris la grue dans ses bras et lui a enlevé tout doucement la flèche. Il lui a lavé la blessure avec de la neige. Puis, il la a reposé au sol et s'est éloigné d'elle à reculons pour ne pas l'effrayer.

La grue a battu des ailes et s'est envolée dans les airs. Elle a décrit un cercle au-dessus du jeune homme comme pour le remercier et elle a poussé un cri avant de disparaître dans les nuages.

Tard dans la nuit, alors qu'il y avait une tempête de neige terrible, le jeune homme, qui se tenait auprès du foyer, a entendu quelqu'un frapper à la porte.

« Mais qui cela peut-il bien être ? Si tard, et par un temps pareil... » s'est-il demandé.

Il a ouvert la porte et est resté figé : une très belle dame se tenait là !

Avant qu'il ne pût lui adresser la parole, la belle dame lui a dit : « Je me suis perdue par ce temps. Pourriez-vous me loger pour cette nuit ?

--- Mais bien sûr! a répondu le jeune homme. Entrez donc, mettez-vous devant le feu. » Et il lui a offert un bol de soupe toute chaude.

« Je vous remercie monsieur. Vous êtes vraiment gentil.

--- Mettez-vous à l'aise, et restez autant que vous le voulez. »

Les jours suivants, le temps ne s'améliorait pas. La belle dame est donc restée plusieurs jours. Elle était bonne ménagère, et le jeune homme, tout content de cette compagnie agréable, commençait à se dire combien il serait triste quand elle partirait.

Un matin, lorsqu'elle lui dit: « Épousez-moi, s'il vous plaît. Je voudrais devenir votre femme », il n'a pu en croire ses oreilles.

Le visage du jeune homme est devenu tout rouge :

« Mais je suis trop pauvre pour vous rendre heureuse.
--- Qu'importe. Si on peut vivre à deux, je serai la plus heureuse du monde. »

Ainsi ils se sont mariés et ont connu des jours heureux.

Mais l'hiver de cette année-là a été long et rude. Alors que le Jour de l'an approchait, il leur était difficile de préparer les festivités.

« Que faire ? Il n'y a presque plus rien à manger. » s'est plaint le jeune homme.

Sa femme a réfléchi un peu avant de lui répondre.

« Il y avait un métier à tisser dans la petite pièce voisine, n'est-ce pas ?

--- Oui, c'est celui de ma mère. Je crois qu'il marche encore.
--- Je vais tisser. Mais je t'en supplie, n'entre pas et ne regarde pas pendant que je suis à l'ouvrage. Jamais. Tu me le jures ?
--- Je te le jure » a répondu le jeune homme quoiqu'un peu surpris de cette étrange promesse. Mais il aimait sa femme.

La femme s'est enfermée dans la petite pièce pendant trois jours et trois nuits. Le jeune homme s'inquiétait pour elle mais se souvenant de sa promesse, il s'est retenu d'aller la voir.

La troisième nuit, sa femme a enfin sorti de la pièce, l'air épuisé mais souriante. Elle tenait une pièce d'étoffe dans ses mains.

« Voilà. Va vendre cette étoffe en ville. Ça se vendra très cher. »

C'était en effet une très belle étoffe, d'une blancheur éclatante, douce et légère comme si elle avait été faite avec le clair de lune. Le jeune homme n'avait jamais vu un aussi joli tissu auparavant.

Le lendemain, il l'a apporté au plus riche marchand de la ville, qui le lui a acheté contre une belle somme.

« Ma chère femme, je te remercie. On pourra passer l'hiver sans problème. Mais je t'en prie, tisse à nouveau, s'il te plaît. Le riche marchand en veut encore, il m'a promis de nous en acheter à un meilleur prix si j'en apporte le plus tôt possible. Nous pourrions devenir riches ! »

A ces mots, la jeune femme n'a répondu pas. Mais, avec un triste sourire, elle a dit :

« D'accord. Je vais me mettre au travail tout de suite. Mais n'oublie pas ta promesse de ne pas me regarder en train de tisser, s'il te plaît. »

Dès cette nuit, la femme s'est mise à l'ouvrage. Le jour suivant aussi. Mais à la différence de la première fois, les bruits du métier étaient espacés, moins rapides et plus lourds. Le jeune homme s'est inquiété, d'autant qu'il lui semblait entendre parfois des cris de douleur.

Il a hésité en pensant à la promesse qu'il avait faite, mais trop inquiet pour sa femme, il a entré dans la pièce. Et qu'a-t-il vu? Aucune trace de sa femme. Mais devant le métier à tisser se trouvait une grue blanche dont plusieurs de ses plumes manquaient. Le jeune homme n'a pu s'empêcher de pousser un cri de surprise.

En le voyant, la grue a repris la forme de sa femme.

« Oui, je suis la grue de l'autre jour. Comme tu m'avais sauvé la vie, j'ai voulu te remercier en t'aidant à vivre. J'étais heureuse d'avoir pu être ta femme. Tu avais besoin d'argent, j'ai donc tissé avec mes propres plumes... »

« Ma chère femme! Si je l'avais su... » a pleuré le mari.

« Je voulais mener une vie tranquille avec toi. Mais maintenant que tu m'as vue, je dois te quitter. »

Il a tenté de la retenir : « Non ! Je ne veux pas que tu partes. Je ne veux pas d'argent, toi seule me suffit ! »

« Cela n'est pas possible. Adieu, mon cher mari. »

Et elle s'est transformée en grue blanche sous les yeux de son mari.

Elle s'est envolée dans le ciel, a fait un cercle au-dessus du jeune homme pétrifié, a poussé un cri déchirant avant de disparaître dans les nuages.

Le jeune homme ne l'a revue plus jamais.

Version 4

Il était une fois un jeune homme qui vivait seul dans la montagne dans une petite maison. Ses parents étaient morts depuis longtemps, et comme il était très pauvre, sa seule ressource était de ramasser du bois et d'aller en vendre aux villages voisins. Il vivait tant bien que mal en se rendant chaque jour dans la forêt.

C'était au début de l'hiver. Un matin, alors que le jeune homme allait faire sa besogne quotidienne malgré le temps neigeux, il a entendu un bruit comme celui d'un triste cri d'animal. Il s'est dirigé dans cette direction et il a aperçu une grue blessée.

Elle était d'une blancheur éclatante. Elle se débattait sur la neige, ne pouvant reprendre son vol. Une flèche avait transpercé son aile.

« Ma pauvre ! Qui te fit une misère pareille ! » a dit le gentil jeune homme.

Il a pris la grue dans ses bras et lui a enlevé tout doucement la flèche. Il lui a lavé la blessure avec de la neige. Puis, il la a reposé au sol et s'est éloigné d'elle à reculons pour ne pas l'effrayer.

La grue a battu des ailes et s'est envolée dans les airs. Elle a décrit un cercle au-dessus du jeune homme comme pour le remercier et elle a poussé un cri avant de disparaître dans les nuages.

Tard dans la nuit, alors qu'il y avait une tempête de neige terrible, le jeune homme, qui se tenait auprès du foyer, a entendu quelqu'un frapper à la porte.

« Mais qui cela peut-il bien être ? Si tard, et par un temps pareil... » s'est-il demandé.

Il a ouvert la porte et est resté figé : une très belle dame se tenait là !

Avant qu'il ne pût lui adresser la parole, la belle dame lui a dit : « Je me perdis par ce temps. Pourriez-vous me loger pour cette nuit ?

--- Mais bien sûr ! a répondu le jeune homme. Entrez donc, mettez-vous devant le feu. » Et il lui a offert un bol de soupe toute chaude.

« Je vous remercie monsieur. Vous êtes vraiment gentil.

--- Mettez-vous à l'aise, et restez autant que vous le voulez. »

Les jours suivants, le temps ne s'améliorait pas. La belle dame est donc restée plusieurs jours. Elle était bonne ménagère, et le jeune homme, tout content de cette compagnie agréable, commençait à se dire combien il serait triste quand elle partirait.

Un matin, lorsqu'elle lui dit : « Épousez-moi, s'il vous plaît. Je voudrais devenir votre femme », il n'a pu en croire ses oreilles.

Le visage du jeune homme est devenu tout rouge :

« Mais je suis trop pauvre pour vous rendre heureuse.

--- Qu'importe. Si on peut vivre à deux, je serai la plus heureuse du monde. »

Ainsi ils se sont mariés et ont connu des jours heureux.

Mais l'hiver de cette année-là a été long et rude. Alors que le Jour de l'an approchait, il leur était difficile de préparer les festivités.

« Que faire ? Il n'y a presque plus rien à manger. » s'est plaint le jeune homme.

Sa femme a réfléchi un peu avant de lui répondre.

« Il y avait un métier à tisser dans la petite pièce voisine, n'est-ce pas ?

--- Oui, c'est celui de ma mère. Je crois qu'il marche encore.

--- Je vais tisser. Mais je t'en supplie, n'entre pas et ne regarde pas pendant que je suis à l'ouvrage. Jamais. Tu me le jures ?

--- Je te le jure » a répondu le jeune homme quoiqu'un peu surpris de cette étrange promesse. Mais il aimait sa femme.

La femme s'est enfermée dans la petite pièce pendant trois jours et trois nuits. Le jeune homme s'inquiétait pour elle mais se souvenant de sa promesse, il s'est retenu d'aller la voir.

La troisième nuit, sa femme a enfin sorti de la pièce, l'air épuisé mais souriante. Elle tenait une pièce d'étoffe dans ses mains.

« Voilà. Va vendre cette étoffe en ville. Ça se vendra très cher. »

C'était en effet une très belle étoffe, d'une blancheur éclatante, douce et légère comme si elle avait été faite avec le clair de lune. Le jeune homme n'avait jamais vu un aussi joli tissu auparavant.

Le lendemain, il l'a apporté au plus riche marchand de la ville, qui le lui a acheté contre une belle somme.

« Ma chère femme, je te remercie. On pourra passer l'hiver sans problème. Mais je t'en prie, tisse à nouveau, s'il te plaît. Le riche marchand en veut encore, il me **promit** de nous en acheter à un meilleur prix si j'en apporte le plus tôt possible. Nous pourrions devenir riches ! »

A ces mots, la jeune femme n'**a répondu** pas. Mais, avec un triste sourire, elle **a dit** :

« D'accord. Je vais me mettre au travail tout de suite. Mais n'oublie pas ta promesse de ne pas me regarder en train de tisser, s'il te plaît. »

Dès cette nuit, la femme **s'est mise** à l'ouvrage. Le jour suivant aussi. Mais à la différence de la première fois, les bruits du métier étaient espacés, moins rapides et plus lourds. Le jeune homme **s'est inquiété**, d'autant qu'il lui semblait entendre parfois des cris de douleur.

Il **a hésité** en pensant à la promesse qu'il avait faite, mais trop inquiet pour sa femme, il **a entré** dans la pièce. **Et qu'a-t-il vu?** Aucune trace de sa femme. Mais devant le métier à tisser se trouvait une grue blanche dont plusieurs de ses plumes manquaient. Le jeune homme n'**a pu** s'empêcher de pousser un cri de surprise.

En le voyant, la grue **a repris** la forme de sa femme.

« Oui, je suis la grue de l'autre jour. Comme tu m'avais sauvé la vie, je **vous** te remercier en t'aidant à vivre. J'étais heureuse d'avoir pu être ta femme. Tu avais besoin d'argent, je donc **tissai** avec mes propres plumes...»

« Ma chère femme! Si je l'avais su... » **a pleuré** le mari.

« Je voulais mener une vie tranquille avec toi. Mais maintenant

que tu **me vis**, je dois te quitter. »

Il **a tenté** de la retenir : « Non ! Je ne veux pas que tu partes. Je ne veux pas d'argent, toi seule me suffit ! »

« Cela n'est pas possible. Adieu, mon cher mari. »

Et elle **s'est transformée** en grue blanche sous les yeux de son mari.

Elle **s'est envolée** dans le ciel, **a fait** un cercle au-dessus du jeune homme pétrifié, **a poussé** un cri déchirant avant de disparaître dans les nuages.

Le jeune homme ne l'**a revue** plus jamais.

参考文献

- 1) 池田晶：聖書ヘブライ語 qatal 形の時制解釈：現代フランス語の複合過去と単純過去を手掛かりに、宇部工業高等専門学校研究報告,69号, pp.22-28, 2023.
- 2) ヴァインリヒ, H.: 時制論—文学テキストの分析, 紀伊國屋書店, 1982.
- 3) 大久保伸子：語り手の時制としての単純過去, 茨城大学教養部紀要, 22号, 291-315, 1990.
- 4) 大賀正喜, メランベルジェ・ガブリエル：和文仏訳のサスペンス：翻訳の考え方, 白水社, 1987.
- 5) 東郷雄二：「あなたも和文仏訳のエルクユール・ボワロになれる」(大賀正喜『和文仏訳のサスペンス』書評), 大阪日仏センターパンフレット, 1998.
- 6) 青木三郎：現代フランス語の「複合過去形」の考察 (1), 文藝言語研究・言語篇, 23号, pp. 1-33, 1993.
- 7) 東郷雄二：フランス文法総まとめ, 白水社, 2019.
- 8) 西村亜子：Les contes du Japon en français フランス語で楽しむ日本昔ばなし, 42-56, IBC パブリッシング, 2015.